

日本国内でも活躍する修了生・在学生



藤岡 篤司 [修了生]

一般社団法人 豊かな暮らしラボトリー

フィリピン・ミンダナオ島の農村部にある現地 NGO 児童養護施設の運営に携わっていたとき、身体的な障害だけでなく、家庭や宗教などを背景に様々な障害を抱えた児童が学校に通うことができている現状を知ったことから、現地に特別支援学級を立ち上げました。そこで、実践だけではなくアカデミックなアプローチも必要だと感じ、本学の修士課程に進学。多様な視点、バックグラウンドを持っている履修生や、世界中に研究フィールドを持っている先生方と出会い、社会課題解決に向けた議論・研究を進めることができました。現在は、NPO での国際的な学習支援プログラム、行政からの委託のまちづくりに関する取り組み、大学の非常勤講師など、国際・教育・福祉などをキーワードに活動しており、本研究科での学びや経験が活かされていると感じています。

曾田 夏記 [修了生]

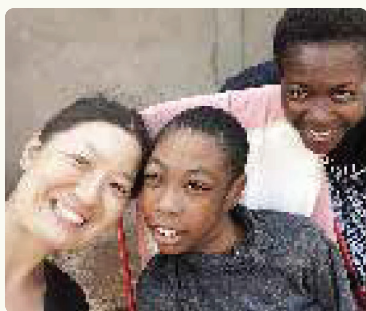
自立生活センター STEP えどがわ 職員

障害者インターナショナル (DPI) 日本会議 特別常任委員

現在、DPI 日本会議の役員として、障害当事者の立場から国内の障害関連法制への政策提言をしたり、江戸川区にある自立生活センターの職員として、地域に暮らすひとりひとりの障害者に寄り添い相談にのったりしています。以前、JICA 職員をしていた際に本研究科に在学し、フィリピン農村部に暮らす障害者の生計機会について、選択を制限する要素は何かを現地で 1 年かけ調査しました。フィールドは江戸川区になりましたが、活動地域の全体像を把握すること、インタビュー時の所作、「障害者」に関する問題の相対化など、修士課程で身に着けた「レンズ」を通し、今「コミュニティ活動」ができていると感じます。仕事と学業の両立は大変でしたが、心から「やってよかった」と思える修士課程でした。



池田 麻衣 [修了生・国際社会開発専攻 博士課程 3 年]



日本で理学療法士として障害児に関わる中で、制度とニーズのギャップに疑問をもち、制度が整備されていない途上国の状況を知りたいと思い青年海外協力隊に参加しました。経験を言葉にして落とし込みたいという思いで進学しました。修士課程では、障害児の学校教育へのアクセシビリティを切り口に、障害とは何かを深め、障害児・者を包摂した社会の構築に関して考えました。様々な分野で活躍する院生さんや先生方との議論で、これまでとは異なる視点での「モノの見かた」を学びました。帰国後も障害分野に関わりたいと考え、特にお子さんの成長・発達のお手伝いをしています。お子さんの成長・発達を考えるうえでは身体機能に限らず、家庭状況、母子関係、社会資源など様々な課題が多様な形で存在します。何がその子の発達に影響を与えるかを様々な視点から考えることが求められます。修士課程での学びが今に活かされていると感じています。



小林 純 [修了生・国際社会開発専攻 博士課程 3 年]

(株) 日本サポートアットホーム

青年海外協力隊（理学療法士）として、東ティモール民主共和国地方部に赴任し、地域社会に根ざしたリハビリテーション（Community Based Rehabilitation: 以下、CBR）に携わる中で、「CBR は障害児の社会参加を促進しているのだろうか」という疑問を抱きました。この疑問を社会開発の視点から解決したいと思い、修士課程に入学しました。研究を通じて、CBR が事業運営に関する意思決定へ障害児とその家族の関与を促進する一方で、地域社会が「CBR は私たちの取り組みではない」と認識し、CBR 運営に関する意思決定へ関与していないことも明らかになり、障害児を取り巻く「地域社会」に目を向ける必要性を感じました。現在、日本地方部の理学療法士として、厚生労働省が全国の市町村向けに提唱して始まった介護予防事業としての通いの場に携わる中で、通いの場が高齢者を含めた多様な個人の参加を支援する地域共生社会に向けた場とプロセスになっているのかを明らかにしたいと思い、博士課程に在籍して研究を続けています。

雨宮 美穂 [修士課程 2 年]

青年海外協力隊としてトンガ王国で活動後、貿易商社で勤務し現在は政府系団体で国際協力の調査や研究に関する調達業務に従事しています。青年海外協力隊として開発現場を経験し、現職に従事する中で、自身の関心やその問題を深掘し、考察する機会を持ちたいと考え、仕事を続けながら学ぶことができ、国際開発現場で求められる専門的な洞察力を養うことができる本研究科への入学を決めました。本研究科では様々なバックグラウンドを持った同期と教授から刺激を受け、多面的な考えや視点を持つことができ、今までできなかった自身の関心と向き合う時間を過ごせています。



大橋 充人 [修了生・国際社会開発専攻 博士課程 2 年]

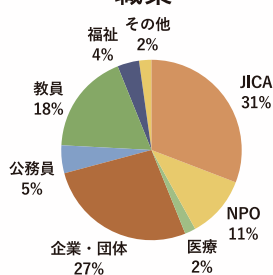
愛知県職員

愛知県庁で様々な仕事に従事する中、多文化共生の仕事に携わることになり、日本で暮らすムスリムのことを知りました。大学時代にアラビア語を勉強したこともあり、彼らに強い関心を抱いたのですが、仕事として深く知ることは難しいだろうと思っていました。そのうちに、ひょんなことから、本研究科のことを知り、ここで彼らのことを研究しようと思いつきました。最初は、国際開発の経験がなく、不安でしたが、これまで取り組んできた仕事は、愛知県をフィールドとした社会開発なのだ気づき、改めて、これまでの仕事を開発の視点から振り返ることができました。また、それ以外にも多くの知識を得、ものの見方を学ぶことができました。偶然入った本研究科ですが、現場目線で実践的な考え方が重視されることが肌に合い、同期の人たちとも気が合って、充実した2年間を送らせていただき、感謝しています。

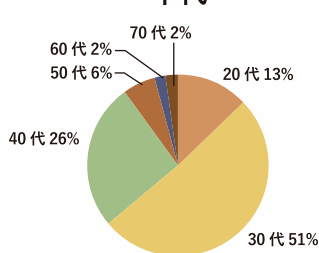
※掲載者の所属などは、2023年6月現在のものです。

在籍者情報・グラフ (2023年4月現在)

職業



年代



居住地

